

当院における輸血副作用報告状況

県立奈良病院 中央臨床検査部

川越 善子 音羽 裕子 辻内 智美 稲垣 明
輸血部 西野 正人

(はじめに)

平成 16 年3月に輸血システムBLAD(富士通)を導入し、同年6月より輸血副作用報告を開始した。

BLAD導入前は臨床側からの自発的な報告であったが、現在は全輸血症例に副作用報告を義務化している。今回、副作用報告状況をまとめたので報告する。

(対象および方法)

対象は平成16年6月1日から12月31日までの7ヶ月間に輸血療法を実施した全症例。実施方法は血液バッグの裏側に副作用報告票を貼り付けて製剤を払い出し、輸血終了時に副作用の有無を記入後輸血部へ返却する。副作用は、輸血開始から終了までの間に発生した症状を記入し、「無」も報告する。返却された副作用報告をBLADに入力すると患者情報に登録される。

(結果)

7ヶ月間に輸血患者406人中18人に副作用が「有」で報告され、うち4人については奈良県赤十字血液センターに原因解明の検査を依頼した。1人に抗血漿蛋白抗体、1人に抗HLA抗体が認められた。また、製剤別では、MAP 1242袋中21袋(1.2%)、PC 191袋中8袋(4.2%)、FFP 639袋中2袋(0.3%)に副作用が報告された。

(まとめ)

BLAD導入前は1年に数件しか輸血副作用の報告はなかったが、全輸血症例において報告することによりその実態を把握できるようになった。今後は、返却された副作用報告を分析し、臨床側へ情報提供することにより、さらに安全な輸血療法が実施できるようにしたい。